個人を救える宗教が何故人類を救えないのか

―「21世紀型の宗教改革」の必要性―

Can Religion Save the Human Race As It Does Individuals? Another Reformation Is Required

道正 洋三 DOSHO. Yozo

はじめに―本稿の視点と構成

「戦争は許してはならない悪である」。

私の思考の原点は日本人が最大の犠牲を払って悟った信念"戦争(殺し合い)は悪だ"にある。これが本稿を支える基本視点となっている。

人類は未だに、戦争は巨悪だと知りながら、そこから抜け出せないでいる。それは何故なのか。その理由を宗教を基軸にして考えてみたい。私は戦争という「文明悪」から人類を救済するためには、いわば「21世紀型の宗教改革」とでも称すべきものが必要不可欠であると考えている。本稿はその基本構想を以下の構成で展開する。

- 1.「個人を救える宗教が何故人類を救えないのか」という疑問をもった契機(事実認識)
- 2. 欧米文明を支える宗教は何故21世紀に入っても 愚かな"殺し合い"に無力なのか
- 3.「21世紀型の宗教改革」の必要性
 - (1) 独善性の克服
 - (2) 東西文化・文明の融合
 - (3)「総合人間学的アプローチ」

1 事実認識

2001年9月11日以降,私には世界文明の行方が見えなくなっていた。国と国の戦争でなく,国と

(不明の)個人ないし集団の戦争が始まったからである。犯罪なら法と言論で決着するが、また、国と国の戦争なら勝ち負けか、交渉で決着すが、国と相手不明のテロ戦争では終わりがない。

2013 年 7 月に入って,海外ニュースはエジプトで起きた新たな政変を連日報じていた。"モルシ支持派と軍の激しい衝突で死者 50 人超"と BBC が伝え,多数の死傷者を手当てする市民が痛ましく,シリアのように内戦にならねばよいがなと思った。

経済でも同様なことが起きている。2008 年 9 月 アメリカ発リーマンショックは世界中に深刻な影響を与え、ギリシャの財政危機に始まる EU 諸国間の緊張も一向に収まらない。そもそも金融詐欺もどきのサブプライムローンの実態と責任の解明も済んでいない。

戦争も金融危機も人災であるが,2011年3月11日,日本は「1000年に一度」の天災と想定外の原発事故という人災とを同時に体験した。近ごろ天災,人災を問わず世界中で異常現象の度合いが高まっている。

2013 年 3 月 20 日, イラク戦争開戦から 10 年, 内外メディアが「イラク戦争は何だったのか」の特 集を組んだ。

米紙ニューヨーク・タイムズ (20 日付) 社説:

『総合人間学』第8号 2014年9月

……イラク戦争で 4500 人近い米兵が戦死, 3 万人以上が負傷,作戦遂行や復興に 2 兆ドル以上を投じて財政赤字を増やし,米国のリーダーシップと力の限界を知らされた。10 万人を超す犠牲者を出したイラクは,イランの影響力が増し「アラブの春」の地域の混乱にも揺さぶられている。……現実はスンニ派とシーア派,アラブ人とクルド人の緊張が深刻化,内戦や国家分裂の恐れもはらむ。

英紙フィナンシャル・タイムズ (19 日付):独自調査で、米政府は民間警備や後方支援、復興工事などで少なくとも 1380 億ドルを民間契約者に支払ったと推計。上位 10 社の企業名と契約高をグラフで表示している。1 位はブッシュ政権のチェイニー副大統領が就任前に最高経営責任者を務めたハリバートン社の元子会社 KBR 社。

朝日「天声人語」(21 日付): ……日本は対米追従にとらわれ、大義なき戦争に加担してしまった▼米国の同盟国でも、ドイツやフランス、カナダは開戦に反対した。……

8月に入り、イランに新しい動きが見えた。強硬派を大差で抑えて当選したロウハニ大統領は就任後の記者会見で「米国が相互尊重に基づく善意を示し、対等の立場で臨めば、対話の道は開けている」と意欲を示した。最高指導者ハメネイ師も「賢明な対話を追求している」と支持、前政権の強硬姿勢で弱化した国内基盤の建て直しを狙ったかに見える。ロウハニ師はパリ亡命中のホメイニ師に付き従い、ハメネイ師とは67年以来交流が続き、体制中枢に強固な基盤があると伝えられている。(日経、7日、11日付)

イスラエルとパレスチナとの中東和平交渉が米国 の仲介で3年ぶりに再開したが,過去半世紀の交渉 再開と中断の繰り返しから,今こそ関係者の良心と 熱意が問われている。

以上は、私が「個人を救える宗教が何故人類を救 えないのか」という疑問をもった契機(事実認識) の一端である。

2 欧米文明を支える宗教は何故 21 世紀に入って も愚かな "殺し合い" に無力なのか

人は各人違う DNA を持ちながら互いに協力できるように、生まれた国の宗教・宗派が違うからといって協力できない筈はない。今中東やアフリカで起きている戦争には日本人の私は全く共感できない。一体何が真因か? 資源、領土、マネー、権力、支配、復讐……等々への欲望がどんなに強くても、同じ宗教・宗派内では決して"殺し合い"はしないだろう。むしろ宗教・宗派対立と、その背後にある国際的政治・経済権力との関連に問題がある。

ユダヤ教→キリスト教→イスラームの一神教,へ レニズムと統合し、科学技術、文化、芸術、産業を 発展させ、自由・民主主義・人権を旗印に世界の近 代化をリードしてきた欧米文明が何故 21 世紀に入 って斯くも愚かな"殺し合い"に無力なのか? 神 話や伝説、神学論争等に捉われずにその原因につい て敢えて私見を述べてみたい。

先ず、預言者と神についての認識の違いを考えて みよう。21世紀戦争の火種、イスラエル・パレス チナ戦争は、ここに端を発していると考えられるか らだ。ユダヤ教ではイエスを含めて預言者は複数、 キリスト教では預言者は同じでもイエスだけは神の 子、イスラームはユダヤ教に近いが、ムハンマドは 最後の預言者ということである。三者の神はそれぞ れ呼称は違うが本質的には同一の神である。しかし、 それぞれの預言者が神から受けた啓示が違う。その ために同じ啓典の民同士で、国家の成立→領土拡張 →十字軍→聖地→救世主再来等をめぐって2千年以 上も争っているのだろうか? 中世から近代にかけ、 シチリア王国ロゲリウス二世のリーダーシップによって、また、オスマン帝国全盛期の税制等巧みな統 治政策によって、異教徒間平和共存が長期間実現したのは例外だったのだろうか? 「一神教」という 宗教・宗派のもつ矛盾は国際的政治・経済権力との 関連で緩和されも強化されもするのだ。

他方アジア諸国、インド、中国、韓国、日本等に目を移すと、そこでもヒンズー教、仏教、儒教、神道等の地域宗教との関連で戦争は起きたが、それらの原因は西洋・中東地域の一神教の預言者と神の認識問題とは次元が異なる。それぞれ人間の欲望の争いとして解決できるのではないか。注意しなければならないのは、インド、スリランカ、ミャンマー、カンボジア、フィリピン等で起きた(ている)戦争はイスラーム(一神教)等の原理主義者が関わることが多いということだ。

一神教の"神"とは人(預言者を含む)が決める神であり、それ自体自己矛盾ではなかろうか? 生まれた地域も民族も違う人間が「この神だけが正しい」とは言い得ない。違う神を信じるのが自然であって、大事なのはどういう神を信じるか、また、違う神を信じる人間同士が仲良くすることであろう。

更に、聖典自体に「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」と記されたり、「アッラーの他に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒なり」と毎日信仰告白するのはイスラーム教徒としては当然であり、尊重しなければならないものであるが、原理主義者は別にして、21世紀を生きる現代人には相応しくないのではなかろうか。中近東その他の騒動の現状を見ると従来の一神教について

全く新しい次元の対応が肝要であると思われる。

次に,戦争の原因のひとつである歴史認識の違い について考えてみたい。8月の終戦記念日の式辞で、 安部晋三首相は「私たちは歴史に対して謙虚に向き 合い、学ぶべき教訓を深く胸に刻みつつ、希望に満 ちた、国の未来を切り拓いてまいります。」と述べ たが、歴代首相が踏襲してきたアジア諸国に対する 加害責任への言及はなかった。他方、広島、長崎で の原爆死没者慰霊式での両市の平和宣言は共に戦争, 被爆という歴史的事実を基に、未来への具体的行動 を求めた。田上富久長崎市長は「日本政府には、被 爆国としての原点に帰ることを求めます。非核三原 則の法制化への取り組み, 北東アジア非核兵器地帯 検討の呼びかけなど、被爆国としてのリーダーシッ プを具体的な行動に移すことを求めます。」と切々 と訴えた。また、広島、長崎の慰霊式典に出席した アメリカの歴史学者と映画監督は戦争と原爆投下に 関し従来の公式発表とは全く違う歴史認識を NHK・ BS 放送で語り、大きな注目を集めている(「オリバ ー・ストーンが語るアメリカ史」10回シリーズ及 び8/25スペシャル番組、早川書房刊同名書)。

日本と隣国との関係悪化や世界のテロ・戦争の原因について、国家間、個人間で何故かくも大きな歴史認識の違いが生じたのか、その真因が究明されなければならない。ここでも宗教が関連してくる。民主主義国家では、また戦後日本国憲法でも「政教分離」は当然の原則とされてきたが、現実に目を移すと、海外国内とも建前と全く違うことが行われてきた。政教が一体化したり、教が政の支配下におかれたりしている。そのため、宗教は個人を「救う」のみならず政党まで「救う」のに、肝心の人類を救ってはいない。むしろ国際政治・経済権力との関連で、

『総合人間学』第8号 2014年9月

宗教が戦争(人殺し)に利用されたり,加担しているのが中東,アフリカ等の現状である。

3 「21世紀型の宗教改革」の必要性

これまで記してきた,国際政治・経済権力との関連で宗教・宗派対立が孕む惨状から脱出するためには,国際的人間関係を新しく紡ぐいわば「21世紀型の宗教改革」が必要であると考える。その柱は,

- (1) 独善性の克服, (2) 東西文化・文明の融合,
- (3) 「総合人間学的アプローチ」の 3 本である。

(1) 独善性の克服

一神教を基本とする欧米文明が現在のテロ戦争の 愚に目覚め平和を回復する道は、それぞれの宗教が 独善性を克服する以外にない。10年前、善悪二元 論の発想から、「悪の枢軸を叩け」「第二の十字軍」 の掛け声で、国連決議抜きのイラク攻撃が始まり、 「米国の単独行動主義」が猛進した。この過ちを繰り返さないことが独善性(独り善がり)の克服である。独善性は使命感と裏腹で、強ければ強いほど独り善がりとなり、狂気となって、他の多くの長所が消え失せてしまう。西洋文明の世界化と一神教の布教活動は歴史的にも一体であった。

独善性の高まりは「内なる敵と恐怖」の連鎖現象でもある。欧米先進国の異常な社会現象(個人の銃保持/犯罪、麻薬、雇い兵、精神異常者の増加、貧富格差の拡大、同性婚の規制緩和等々)が内なる敵と恐怖を生む。(下河辺知子『アメリカン・テロル』彩流社、2009)更に、独善性に、力の支配と、負の終末観が結びつくと最悪となる。自爆テロで本人は「天国」に行けても被害者は地獄となる。シリアで現実化した化学兵器使用や核戦争が始まれば世界は地獄となる。

(2) 東西文化・文明の融合

これは方向として必然ではあっても、融合しない (すべきでない)面もあり、目標の設定と過程にお ける対話と協力が肝要である。過去に多くの文明・ 宗教間対話が実施されてきた。国連は 2001 年を 「文明間対話の年」と決議し、その提唱者はイラン のハタミ大統領であったが、その年に 9.11 事件が 起き,ブッシュ大統領に「悪の枢軸」呼ばわりされ て文明間対話は中断した。2005 年には世界宗教・ 宗教史会議が東京で、2006 年には世界宗教者平和 会議が京都で開催され、それぞれ数十カ国の国家代 表、宗教リーダーを含む千人規模の参加者による活 発な討議が行われた。2013年11月第9回世界宗教 者平和会議(ウィーン)の旗印は"他者と共に生き る歓び"であり、そのための行動指針も示された。 他方, NGO エルダーズ (ネルソン・マンデラ, ジミ ー・カーター等 12 人) の地道な国際的活動も行わ れてきた(2013.12.28NHK・BS 放送「"千年の英知" が語る戦争と平和」)。

今後の東西交流成否のカギはアジア思想,宗教哲学の長所の再発見と強力発信にあるが,紙幅の都合で,キーワーズの列記にとどめたい。

「この世を動かす力は、因果関係以外にはあり得ない……釈迦の仏教は……きわめて合理的で現実的な考え方で成り立つ」(佐々木閑『真理のことば』)

(一神教の布教活動に比べて)「伝道が成立する動因は,……僧侶のさとり体験が他者に共鳴現象を誘発し,あたかも伝染するように広まった」(白石凌海『仏陀 南伝の旅』)

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福 はあり得ない」(宮沢賢治)

「大自然に対応すれば共同の精神と思想があり得る わけである」(湖 蘭成『日本及び日本人に寄せる』) 「敬神愛人」と「敬天愛人」の一字違いの意味は 大きい。「天と地の間(際)に神(真理)は宿る」。 仏教の「無」の思想が「融合」の力を発揮すること が期待されている。さらに、日本の象徴天皇制(権 威と権力の分離)や式年遷宮等の伝統文化も極めて 含蓄に富む。 に生まれついた人間などいない。人は憎むことを學ぶのだ。……ならば愛することも学べるだろう」が心に強く響く。)

道正 洋三 (元 NEC 本社理事)

(3)「総合人間学的アプローチ」

近代文明の暗部,なかんずく,戦争という愚行から人類を解放するためには,いわば「21 世紀型の宗教改革」が必要であるということを本論で論じた。それでは「21 世紀型の宗教改革」を先導する主動力は何であろうか。「総合人間学的アプローチ」であると確信する。

7年前発足した綜合人間学会は将に本稿で論じた「文明悪」からの人類救済を重要課題の一つとしてきた。『総合人間学 第7号』(学文社,2013年) IV「3.11以後,いま総合人間学を問う」では,小原秀雄の「自己家畜化論」と小林直樹の「文明悪からの人類解放理論」がその代表的理論としてとりあげられており,その有効性が期待されている。私も,前者の理論的枠組みと,後者の理論体系を高く評価する。本稿との関連で,前者の主体(飼い主=指導者)の宗教哲学と,後者の東西文化・文明協力に大きく期待する。本学会では様々な有効な提言・研究が蓄積されている。それらは一体となって,戦争の愚行から人類を救済するという,時代の最重要課題に立ち向かい,人類を救えない「宗教」に喝を入れることになると確信する。

(2013.09.25 記,シリアの戦火拡大防止のため, 米国,イラン両大統領が国連総会でスピーチした日) (本稿校正中,12月5日95歳で亡くなった南アフ リカのネルソン・マンデラ大統領の言葉「憎むよう